

Małgorzata Sobczyk¹
ORCID: 0000-0002-1697-1990

曹洞宗における血盆経信仰の受容：
新出資料『血盆経因縁 侍者比丘記』を例に

Reception of *Ketsubon-kyō* (*Bloody Pond Sutra*) in Japanese Sōtō Zen School: Insights from a Newly Discovered Manuscript

DOI: <https://doi.org/10.14746/sijp.2024.72.5>

ABSTRACT:

This paper provides new insights into the reception of *Ketsubon-kyō* (*Bloody Pond Sutra*) within the Sōtō Zen tradition, focusing on a recently-obtained anonymous manuscript titled *Ketsubon-kyō Innen* (*Circumstances Surrounding the Emergence of Bloody Pond Sutra*). Building upon previous research (Nakano Yūshin, Nakano Jūsaī, Kōdate Naomi) that confirms strong associations between the *Bloody Pond Sutra* and Buddhist ceremonies of bestowing precepts (*jukai-e*), this paper argues that the manuscript contains a draft of a sermon delivered (or meant to be delivered) in two sessions to attendants of such a ceremony held at an unidentified temple – suggested by certain details to be located in Kyoto or its vicinity.

Written by a person who identifies himself merely as a temple servant (*jisha biku*), it offers a unique synthesis of materials addressing women's impurity caused by blood and their potential for salvation. It primarily combines two texts with diverse origins: *Ketsubon-kyō wage* (*Japanese Exposition of Bloody Pond Sutra*), a lengthy commentary from 1713 by Shōyo Ganteki from the Pure Land School (Jōdoshū), and *Ketsubon-kyō engi* (*An Account of the Origin of Bloody Pond Sutra*) popularized in the late eighteenth century through woodblock-printed booklets by Shōsen-ji (previously known as Hosshō-ji), a prominent center of the *Ketsubon-kyō* cult within the Sōtō Zen School. With this presentation of the manuscript, this paper sheds light on the reception and interpretation of *Ketsubon-kyō* within the Sōtō Zen School. It demonstrates a common understanding of the role of the *Bloody Pond Sutra*, transcending sectarian differences to the extent of reusing exegetical materials from the Pure Land School in Zen preaching.

¹ニコラウス・コペルニクス大学東洋学科准教授。日本語・日本文化博士。研究分野：キリシタン、日本仏教における女性。連絡先: m_sobczyk@umk.pl.

KEYWORDS: *Ketsubon-kyō (Bloody Pond Sutra), Ketsubon-kyō waga (Japanese Exposition of Bloody Pond Sutra), Shōyo Ganteki, bestowing precepts, women, impurity, Sōtō Zen, preaching*

要旨

本稿は、おおよそ十八世紀後半～十九世紀頃に成立したと推定される私蔵本『血盆経因縁 侍者比丘記』（以下、『因縁』と略す）の全文を翻刻し、その性格について明らかにしたものである。

『因縁』は墨付き丁三十七丁を数え、口語体で書かれた二日連夜にわたる説教の形式をとっている。その内容は正泉寺系血盆経縁起を中心に据え、女人不浄に関連する種々な事柄をまとめたものである。分析の結果、それらの典拠および配置は大いに松誉巖的著『血盆経和解』（一七一三年刊）（以下、『和解』と略す）に依ることが明白となった。『和解』自体が、勸化活動のための材料として撰述されたことが先学によって指摘されてきたが、その具体的な利用を窺わせる資料がこれまで他に知られていなかった。

また、『因縁』で最も大きな分量を占める血盆経縁起に関しては、十八世紀後半に曹洞宗で流布したものに忠実であるが、その事実に着目し、本書の性格をより深く探る手掛かりとした。曹洞宗の授戒会の一環として、女性参加者に血盆経の護符を授けることがあったが、その際、同縁起を説いたことを、雲樞泰禅述『戒会落草談』（一九〇九年刊、一八〇四年述）によって確かめられる。このような内容が授戒会中の説教に含まれたことを『禅門住職行持学全集』（一九五二年刊）などの手引書によっても裏付けられる。

本稿で紹介した新出資料『因縁』は、二日間にわたる構成、『和解』という血盆経の解説書および正泉寺所伝の縁起本を組み合わせた内容、そして口語的文体といった面で、説教と深い関わりを持っており、その説教の場と想定できるのは、授戒会であったと結論付けられた。

キーワード：血盆経、血盆経和解、松誉巖的、授戒会、説教、女性、曹洞宗

本稿では、私蔵の写本『血盆経因縁 侍者比丘記』（以下、『因縁』と略す）の全文を翻刻することによって、血盆経信仰を曹洞宗と結びつける、新たな資料を提示するとともに、本写本の性格について明らかにする。後に詳しく述べるように、それが浄土宗所属の松誉巖的が著した『血盆経和解』（一七一三年刊）（以下、『和解』と略す）に大いに依拠するものとして、宗派を超えた『和解』の利用の具体相を伝える貴重な資料であり、女人救済をめぐる言説が浄土系仏教から曹洞宗へ転用された事象を示す。公開されている資料から判断すると、血盆経の注釈書がごく限られた範囲でしか流布しておらず、本稿で紹介する『因縁』はその伝播を追うことができる点で学術上意義が大きい。

奥書を持たない『因縁』の確かな作成年代は未詳であるが、おおよそ十八世紀後半〜十九世紀頃の内容と目される。この推定を成り立たせる主な根拠は、正泉寺系（つまり曹洞宗の）血盆経縁起の内容を取り込んでいることである。作者（あるいは書写者）についての唯一の手掛かりは、裏表紙に記載された

「厳密にいうと、「侍者比丘記」は表題の一部というよりも本資料の作成者を指すと考えられるが、表紙に記載されているため、ここで外題に含めることにした。

存在が知られている資料は、血盆経の内容に言及した瓦屋禪寺蔵『太子伝』（1466書写）所収の記述を嚆矢とする（牧野、1991）。日光山輪王寺蔵『血盆経談義私』（1599年書写）が最も詳細な解説書である（高達、牧野2000）。いずれも天台色の濃い内容を持つ。本稿で比較対象とする、『血盆経和解』は版本であるだけに、より広く浸透していたと十分予想できるが、それを裏付ける資料は今まで提示されて来なかった。

民間に最も知れ渡った正泉寺系の血盆経縁起類は、十八世紀に成立したものである（中野、1994、127頁）。この縁起のより古い形態を『血盆経談義私』で確認できるが、目連救母説話に倣って、下総国法性寺（後に正泉寺に改名）長老が母親を地獄から救い出す

「貫宗拝持」という言葉である。この人物を特定するのは難しいが、禅宗（具体的に曹洞宗）関係の僧侶であったことだけは確実である。それが、本文で石屋和尚こと石屋真梁マサノリに関する説話を取り上げる際（二十七～二十八丁）、「我が宗門」の石屋と述べたことから分かる。この説話の内容自体は松誉巖的の『和解』に忠実であるが、当該箇所は「禅宗洞家」の石屋（松誉2014: 227）とあったところを、「我が宗門」の石屋に置き換えてある。さらに断言できるのは、『因縁』の作成にかかわった人物が京都、あるいは京都周辺の寺院で活躍したということである。その根拠も本資料の本文に求めることができるが、女人禁制について述べる際、「近イ所ニテ比叡山」（十二丁オ）とし、寺参りを勧める際、「都コ名所ト力都往来ト力」（二十丁）という書物を取り上げ、「王城ノ地ニハ法華経八軸ヲ書キ写メ京洛中ニチリバメテアル」（二十丁）とし、特に都の寺院に参詣することの功德を力説している。以上が、『因縁』が成立した宗派および地域を特定する上で手掛かりとなる主な記述である。

この写本がいかなる目的で作られたかについて考えると、口語体で書かれた、二日連夜にわたる説教を成す形式にまず着目する必要がある。第一座の説教は寺参りを勧める呼びかけを冒頭に置き、それに

設定となっている。江戸時代に流布した正泉寺伝では、救済の対象は北条時頼の娘、法性尼に変わった点で新旧類型の違いが認められよう。

＊十四世紀から十五世紀にかけて活躍した曹洞宗の僧。本稿で紹介する資料では妙西寺の開祖として登場する。

対応し、第二座が寺参りの功德を説く言葉で結ばれる。また、一座目の末尾には「先ツ今晚ハ是デ置マシヤウ余ハ又明晩話テキカセマ正」（十九丁才）とあることから、連続性を持つことが分かる。区切に当たる十九丁ウは白丁のままである。作成者自身がそれを「ヘタノ長カ談儀」（三十二丁ウ）と謙って呼んでいる。なお、書き出しを中心に見消および墨で塗りつぶした部分が、推敲を重ねた跡をうかがわせており、よって本書は下書きの様相を呈すると言えよう。

『因縁』の説教との関わりは形式にとどまらず、内容によっても了解されよう。本資料には章節が設けられていないが、便宜的に以下の項目に小分けできる。

一 日目

- 一、 聞き手への挨拶、寺参りの勧め
- 二、 正泉寺系血盆経縁起の前半（法性尼の霊が和尚さんに血の池からの救出を求めるところまで）
- 三、 月水による不浄と別火生活
- 四、 弘法大師の母君が女人結界を破り、高野山に登ろうとした話
- 五、 天狗が女性から霊山を守った二つの話
- 六、 役行者の母君が女人結界を破り、大峰山に登ろうとした話
- 七、 結びの挨拶

二目

八、 聞き手への挨拶

九、 正泉寺系血盆経縁起の後半

十、 池の水が血に染まった話

十一、 石屋和尚が血の池で苦しむ女性を成仏させた話

十二、 ある老人が金銭的報酬との引き換えに念仏を唱えた話

十三、 閉会の挨拶（特に寺参りの勧め、善根の勧め）

このような内容の組み合わせには独自性が認められるものの、その下敷きとなった材料は概ね松誉巖的の『和解』と深い関係にある。詳しく見ていくと、まず初日の説教のなかで、月の障りと別火生活について述べる際、月水が一代の内、三十三年続く点、上代の女性が二十歳になって初めて月経を迎えた点、次第に「世知がしこく」（『因縁』）、あるいは「心賢しく」（『和解』）なったことによって、より早く初潮を見るようになった点で（松誉2014…95）⁹、松誉の著書と一致している。それに続け

⁹ ただし、『和解』では、初潮の年齢を十二、十三歳としているのに対して、『因縁』では十三、十四歳としている。

て、公家武家世家などで、月経中の女性が七日間別火生活を送ることについて述べているが、中下の女性にとつてそれが困難であること、不浄の身でありながら「神明庚申等に供物」をささげたりすることによつて却つて業障を作り、諸仏に救われまいというふうにならざるに両書が同じ論を展開する。

その次に説教が女人禁制に及ぶが、まず空海の母公が高野山に登ろうとした説話に基づき、不浄な身のまま霊場を踏むことを戒めている。この説話は複数の文献に記録されているが、『因縁』の内容を『和解』と照らし合わせることで、両者が詳細においてまで酷似することがより一層浮かび上がってくる。二、三点を挙げると、その出来事を天長八年五月、つまり阿光夜午前七十九歳の時とする点、空海が花坂まで迎えに来た点、阿光夜午前が先に進むとした時、火の雨が降った点、空海が神通力によつて盤石を押し上げ、老女をかくまった点、そして阿光夜午前に登山をあきらめさせるために袈裟を地に敷いて、その上を渡らせた点で（十三丁オ〜十七丁オ）（松誉2014・101-102）、⁹⁵両書が直接的な影響関係にあることを思わせるほど、一致するものである。

⁹⁵ただし、松誉がそれを「別家に籠」と表現している。松誉2014・95。

⁹⁶「この内容を他の文献と照らし合わせると、いくつかの顕著な違いに気づく。例えば、説経『かるかや』（室木1997・52-54）では、母御は八十三歳の時、空海と矢立の杉で顔を合わせる。母御が大地の底にはまり込む。空海が親子を名乗り、母御がまたいだ袈裟が火焰となり、天へ上るといふような相違点を指摘できる。

この説話と関連して、大天狗とその眷属に当たると、九億四万余りの小天狗が高野山をはじめ、霊山を守ることに触れ（十二丁ウ）、それを裏付ける挿話として、ある女性が大門辺りで天狗に真二つに引き裂かれた話、そして笠置の浪人の二人の娘が男装し、高野山の女人結界を侵そうとした時、天狗に杉の梢に掛けられた話を紹介している（十七丁ウ〜十八丁オ）（松誉2014…1000—1001）。

その直後に『因縁』では役行者の母が大峯に登ろうとした話が置かれている。このような流れは『和解』と近似しているのみならず、母が蓑笠を身に着けており、五十丁余りの距離を進んだところで嵐に遭い、息子と会えなかった無念さから足摺したといった細部までが（十八丁オ〜十八丁ウ）（松誉2014…1011—1022）『和解』に極めて忠実である。

ここまでの考察を踏まえれば、『因縁』の著者が血盆経信仰に関連する材料を『和解』から選び、一書にまとめたことが明らかである。先学が既に指摘した通り、江戸時代の僧侶は談義説教を通じて、血盆経信仰の喧伝に努めた。松誉巖的はまさに、このような布教活動を行なうことを前提に『和解』を執筆したとされており（高達1989…84）、本稿で紹介する新出資料『因縁』はそれを大いに参照したことは、松誉の意図を引き継いでいるとさえ言えよう。

ここで一つ残された課題は、松誉巖的著に見出せない正泉寺系血盆経縁起の存在である。本縁起の成立は十八世紀中葉にさかのぼるため、松誉がそれを知りえなかったことは当然であるが、私見では、それをあえて『因縁』の中心に据えたことは、本書の性格に関わる重要な示唆を与えている。というのは、かつて、曹洞宗の授戒会において女性参加者を対象に血盆経護符の配付が行われたことは、住職用のいくつかの手引書によつて確認できる（中野1987・123）。この血盆経の授与がいつから始まったかを特定するのは難しいが、常安寺の事例が示すように（泰禅1909・1）、少なくとも『因縁』の成立時期に当たる十九世紀初頭には既に行われていた。法会の五日目には、登壇に先立ち、戒弟が懺悔をしたが、その際、不浄除けの目的で血盆経を授ける手順が永久岳水著『禅門住職行持学全集』（一九五二年刊）などに記載されている。

その中で注目すべきなのは、護符の作り方について説明した上で、「血盆経は下総国我孫子町正泉寺の和尚が感得した」と述べており、「血盆経の因縁を詳しく知りたい人」に雲樞和尚の『戒会落草談』

この縁起文を伝える、最古の写本は元文元年（一七三六年）の年号を有するが、それを撰述したとされる人物（千丈実巖）の年齢（一七二二年頃生まれ）から考えると、信憑性が乏しい。一方で、年号を有する刊本で最古のものが寛政四年（一七九二年）にさかのぼる（中野1994・127）。既に述べたように、それより一段古い形態を残す縁起は『血盆経談義私』に記載されているが、血盆経の供養を求めるのは、法性寺の長老の亡き母である点で、後年の話と大きく異なる（牧野、高達、牧野2000・17）。なお、血盆経授与に関する記述は一九八八年の修訂版から姿を消し、このような手順が廃止されたことを窺がわせる。

を参照するように勧めている箇所である（中野1987・123）。これまでは、血盆経に関する記述を含む授戒説教として、雲檀泰禪が一八〇四年に志摩の常安寺において説いた『戒会落草談』（一九〇九年刊）が知られていたが、それがまさに曹洞宗で流布した、正泉寺系血盆経縁起を中心に展開するものであり、『因縁』と明らかに軌を一にしている。その中で雲檀和尚は、血盆経が授戒会の一環として女性に施与される事実に触れ、「その縁起も折節は講説に及ぶもの、それを正しく理解してもらうためにはあえて自らの説教に取り入れることを説明している（泰禪1909・213）。ここには、『因縁』もやはり同じような授戒説教として作成されたさらなる根拠を見出すことができる。今一度『禪門住職行持学全集』に戻ると、血盆経授与が参加者全員に義務付けられた手続きではなく、不浄のまま登壇するのに抵抗を感じる女性たちを安心させるための手段（中野1987・123）として位置づけられていたことに注目すべきである。雲檀和尚もまた血盆経の利用を勧めたのは、やはりそれを受けるかどうか授戒会参加者の意思に委ねられたからであろう。そう考えると、説教で本経縁起とその功德を大きく取り上げることには、聴衆の信仰を促し、その授与を希望する戒弟を増やす意図があったのではなからうか。

『因縁』の性格に関する以上の二、三の指摘をまとめると、本書が二日にわたる構成、『和解』という血盆経の解説書および正泉寺所伝の縁起本を組み合わせた内容、そして口語的文体といった面で、説

教と深い関わりを持っており、その説教の場となった（あるいはなる予定であった）のは、京都、もしくはその周辺で開催された授戒会であったと結論付けられる。その作者が『和解』から特に物語性のものである。俗耳にかなう説教の体裁に整えたのである。

参考文献

- 『因縁』= 『血盆経因縁 侍者比丘記』
 『血盆経因縁 侍者比丘記』（写本）、著者私蔵
 高達奈緒美 1989. 「資料紹介『血盆経和解』」近世期浄土宗における血盆経信仰・『仏教民俗研究』6:59-91.
 泰禅 1909. 『授戒説教』・高田道見校・東京都：仏教館.
 高達奈緒美、牧野和夫 2000. 「日光山輪王寺蔵慶長四年釈舜貞写『血盆経談義私』略解題並びに翻刻」『実践女子大学文学部紀要』43集.
 中野重哉 1987. 「宗門布教上における差別事象（一）」性差別（『血盆経』）について『教化研究』30:283-290.
 中野優信（優子） 1994. 「曹洞宗における血盆経信仰（一）」『曹洞宗宗学研究所紀要』8:115-128.
 松誉巖的 2014. 『東洋大学附属図書館哲学堂文庫蔵』佛説大蔵正教血盆経和解』・高達奈緒美編・東京都：岩田書院影印叢刊.
 牧野和夫 1991. 『中世の説話と学問』・大阪市：和泉書院.

室木弥太郎校注 1997. 『説経集』、新潮日本古典全集、東京都：新潮社。
『和解』= 松誉 2014.

凡例

翻刻に際して、漢字・仮名遣いは原則として底本通りとした。なお、仮名の大字小字の区別をなくし、大きさを統一した。

漢字の字体については、なるべく底本に従った。改行および句読点も底本通りとした。

二文字以上のまとまりの繰り返しを、底本通りに々々、あるいは／＼で表示した。作者による見消の場合、それを取り消し線で示し、訂正後の文字をルビとして記載した。塗り潰しの場合、判読可能な場合に限り、同様にルビとして訂正後の文字を記載した。

資料翻刻

(1丁オ) 扱ドナタモヨフ御参詣ヲナサレテ
拙僧ハ至テ愚僧也。又至テドツ辨デ御座ルデ。
ヤシタ
御座ル

何ヲ云テ聞セ増テモ。分リ兼マ
レシテ。肩ガイタウ御座
正ケレドモ。ケンビキ

デモ起ランヨフシテ。聞テモラワ子バナラン。世間ノ

諺ニモ。小米モカメハアマイト
申ネ
去アガ
御座ルデ
アルデ。分ラン

更テモ。聞キ々々スルト。後チニハ (ママ) 耳フナリ増ス依テ

今晚ラモ。誠ノ極信心デ参ル人ハ少イ今夜ハ

和尚カドンナヲ云カ。イテ聞テコフ杯ト思フテ

(1丁ウ) ク 来ル人ガ多イ者ジヤ。殊ニ禅宗ノ衆ハ寺参リガ

至テ。キライジヤ。其寺参ハキライジヤナレドモ極樂

参ハ至テスキジヤ。地又地獄ヘユクヲハ猶々キライ

ジヤ。其地獄エ行ヲガキライナラバ是非寺参リガ

スキデナケ子ハナラン。寺参モセズ。善根功德モ

セズ。只アケクレ名聞利欲ニフケリ。其上

(2丁オ) 榮 (ママ) 様榮果ニ暮シテ居テ。ソフシテ。ヌク／＼ト

極樂浄土エ。往生ヲシヨウト云フハ。トテモ

ナラン。其様ナ牡丹餅ニ砂糖付ケテ、喰フ様

ナ_レハ。皆_レナ。誰モスキジヤケレドモ。中々其ノ様

ナムマイ_レハナイ。ヨク_レノ大善知識カ。或_レ小

高貴高德ノ人カ。又ハ菩提心ノ深ヒ人カシラズ。

ソレトテモ。急度請合ニハタ_レレン。ジヤニ依テ。

随分平常王_レ百木十_レ田心口。土_テ掛ケテ。兔角ニ

(2丁ウ) 悪_レ叟ヲセン様ニシテ。善根功德ヲ心口掛ケル

ガ_レヨ_レイ_レ分ケテ。女衆ハ猶更成佛ガ六ツカシウ

御座ルカ_レテ。心口掛ケノ上ニ心掛ケテ。念佛稱名。

善根功德ヲ。大切ニセ子バナラン。マ_レノ皮ヨ_レ。

死_レテ地獄エ井タラ。イタ時ノ_レト云フヨフナ

了簡ガ出ルト。直ニ来世ハ地獄ノ釜ノ中_レシヤ

桿_レドウ_レズ其様ナ了簡ヲ起サズト。ナンデモ

カデモ。名ニ^{クヒ}、喰付テナリトモ。極楽浄土江。往生

(3丁才)ヲセ子バナラント思フテ。^シ仕叟スルトモ手ニモ。

又子タ間ニモ。念佛称名シテ。必ズ悪心ノ

起ラヌ様ニセ子バナラン

なるよふにならふと云ふは捨言葉

たゞなすよふになると心得と云

古歌ガアル。扱テ。我宗旨ニハ。血盆経ト云フ

御経カ御座ル。此血盆経ト云フ処中ノ御経ハ。

男衆ノヲハ少シモナイ。始メカラ終リ迄。女人ノヲ

(3丁ウ)ヲ斗リ。釈迦如来ノ御説キ被^レ成タ御経テ御

座ル。此御経ノ咄シヲスルト。又女ゴ衆ヲ太分

ウルク云ハ子バナランケレドモ。畏薬中チキ

苦シ。金^{ゲン}書耳ニサコフト御座ル。何レヨイヤ

薬リ小甚ダ中チキハニゴフ御座ル。ヨイヤヲ聞ク

牛耳ガイタウ御座ルゾ。左様中心中得

ナサルガヨイ。此血盆経ヲ説テハ。中々女コ衆ノ

耳エハ這入兼子ルデ。血盆経涌出之因縁ヲ

(4丁才) 申テ聞カセマシヤウ。此血盆経ノ因縁ハ。関東

下総ノ国。相馬郡。(マヤ) 癡度村。法性寺ト申寺ガ

御座^{アル}ル。是ガ則チ。血盆経ノ因縁ノ始デ御

座ル。此寺ノ檀那ノ内ニ。十三歳ニナル処ノ娘

ガ有ツタ処ガ。俄ニ病氣ニナ^ル。ツテ御座ル其

病氣。ト申^ゾ中々常底ノ病氣。^{ボノナイ}ト小見^テ。先ツ。

腰ヨリ下モハ。^朱トヤケノ如ク血ニ染リ。^{カシラ}頭^ノキチヨリ

五色ノ火焰ガモエアガリ。アラ苦ルシヤ。絶エ

(4丁ウ) ガタヤト云テ。空中エ飛上リ。卧^{コロビ}シ^ナ転テ泣キ

呼ブ故エ。如何ナル者モ誠ニ驚ロキ怖レテ居ル
ケレトモ。トント仕様ガナイ。ソコデ父母両親ワ。

氣チガイノ様ニナツテ。佛神ヲ祈ルヤラ。醫者

ヲ迎ヒニ行ヤラ。山伏ヲ頼ンテ祈禱ヲスルヤラ。

薬ヲ吞スヤラ。種々無量ノヲ致スケレドモ。

ナンニモナラン。暫ク致^{スル}ネト。去^ルフト今ノ娘ガ申

ニハ。ドウゾ菩提所法性寺ノ。方丈ニ御目ニ

(5丁オ) 掛リタイ ^{ゴ。ドフゾ} ^{サウク} ^{下サレ}
 ↓カ^{サウク}早々請待ヲシテ
 ↓クレイト申ス吏

故。急々法性寺江使ヒヲヤリ増タ処ガ。方丈

モ何更ヤラト申テ。御出ナサレタ。御座ル。

方丈御出被^レ成タト娘エ申ト。其様ナ病人ナ

レトモ。 ^ト 門口チ迫出迎ヒニ出テ。直ニ礼拝恭敬ヲ致シ

テ。扱テ^レ方丈様。私シガ申スヲ。必ズ御疑ヒ

ナサレテ下サルナ。真実ニ御聞キ下サレ。

私シハ。昔シ最明寺時頼ガ娘。尼御寮。法性尼ト申者テゴザル。

(5丁ウ) 我父最明寺時頼。法性寺ヲ建立致シテ。

則チ我名ヲスグニ取テ。法性寺ト。寺号ニ付

ケタノデ御座ル。私シワ発心致シテ。尼ニハ成リ

増テ御座ルケレドモ。角兔^{下上}一代カ間ダ。栄果

ニ暮ラシテ。十兩^キ三業ヲモツ^シシマズ。持戒

修善ノ志シモ御座ラズ。イタヅラ二月日ヲ

送り増^{タガ}才。御座ル悲ヒ哉。時人ヲ不^レ待。ヨワヒ

七十二シテ命終リマシテ御座ル。扱テ地獄道

(6丁オ) ニハ貴賤ト云テ。ヨイ者モ。悪ヒ者モ。金持チモ。

貧乏^{ボッ}人モ。家ガラモ。氏スジヤウモ。一向ニ差

別ガ御座ラン。兔角^{コノヨ}。現世^デ。善根功德ヲ

致シタリ。念佛称名^デモ。勢出シテ致シタ

者ガ。直様極楽浄土江往生致シタリ。又ハ

天ニ生ジタリ致シマスケレトモ。私ハ。今申ス如ク。

(栄カ)

一代ノ内。永様栄果ニ暮ラシテ。善根功德

ガドノ様ナ者ヤラ。一向ニ知ラン処ロノ罪業ニ

(6丁ウ) 依テ。死テ血盆地獄エ落テ御座ル。今スデニ生

ヲ變メ。手賀沼ト云所ノ。水中ニ。蛇身トナリ。

増頭上カシラニハ十六本ノ角ヲ戴キ。三熱チツノ苦ル

シミヲ受ルマハ。中々以テ私ガ口チニ申様ナマデハ

御座ラン。其上ヘマダ。血盆地獄ノ苦ヲ受ルマ御

座ル。若シウソイツワリ 偽イツワリジヤト思召スナラバ。ト云フテ

紙ヲ十枚斗リ取り出シテ。自分ノカラダヲ

撫ヌデタ処ガ。誠ニ朱ノ如クニ染ル。此様ナ物

(7丁オ) デ御座ルカラ。中々苦痛ニ。夜ル昼ルタエ兼カ子

増スト申テ。暫ク絶エ入ウ。死シンダダルヨフニ成タ。

ソコデ方丈ガ。娘ニ御問ヒ被成ニハ。其血盆地

獄ノ苦患ハ。先ツドノ様ナモノジヤトヲフ。仰セラ

レタレバ。娘ガ申ニハ。一ト度ビ女ナト性ヲ受ケ
タル者ハ。タトエ。大名高家ノ息女タリトモ。又ハ

下賤(貧カ)。貧民ノ女ナタリトモ。後生菩提ノ心ロウスク。

嫉妬邪淫ノ念深ク。月水ト云テ。大悪不

(7丁ウ) 淨ヲ。月ニ一度ツゝ流シ。猶又子ヲ産ム時ワ。

穢血フケツヲ流シテ。地神水神山神。スベテ一切ノ

佛神ヲケガス故ニ。命終シテ。此血盆地獄エ

落テ。苦惱ヲ受ル。夜ル昼ル六度ノ呵シヤク責ニ。罪

人ヲクルシメ。又其穢血ヲノマサント云テ。鬼

共ガ鉄棒ヲ振り上げ。打チヨウチヤクシ。又タ

血盆地ノ内エ追ヒ込マレ。呼バントスレド一向ニ声サケ

モ出ズ。池ノ中ニハ。無量無辺ノ虫ニ喰ハレ。

(8丁オ) 肉ヲ破リ骨ヲ喰フ。其時ノ苦シサ。中々言葉ノ

中々及ブコデハ御座リマセヌサシ。又或時ハ。地獄ノ中ニ。
 蓮ノ華ガ。化現シテ。佛果ヲ得ル人モアリ。又現世
 ノ作善ニ依テ。一旦ハ此地獄ニ落ルト雖トモ。直ニ
 生天スル人モアリ。又命終ノ後チ。現世ニ残り
 シ父母。子孫ノ供養追善ニ依テ。忽チ地獄ヲ。
 出離ノ人モアルケレド。私シヲ。誰レ一人供養
 致シテクレル者モ御座ラズ。ドウゾ。大慈大
 (8丁ウ)悲。我ヲ御救ヒ被成テ下サレイト申ス故。方丈
 ノ申サルニハ。血盆地獄ノ苦惱ハ。ドノ様ナ。
 供養追善デタスカルゾト被レ仰御尋ナサレタタ処方。左様
 デ御座ル。釈迦如来一代ノ所説。五千余
 卷ノ御経ノ内ニ。血盆経ト申ガ御座ルカネ。ド
 ウゾ此経ヲ七日ノ間ダ。毎日千卷宛。読誦
 被レ成テ下サレタラバ。血盆地獄ノ苦患。マサニ
 現世ノ虵身共ニ遁ルノデ御座ル。其功德ニ
 (9丁オ)依リ増テ。私シ一人デハ御座ラン只今血盆地獄ニ落テ居ル者モ。皆ナ
 一緒ニ。地獄ノ苦患ヲノガレマスル。殊ニ末世末代ノ
 女人。此地獄ノ苦悩ヲノガレント思フ者ハ。血盆
 経ヲ木本所持スレバ。血盆地獄エ落ル悪業ヲ遁レ
 ノカレマスルデ。ドフゾ其趣キヲ。末世ノ女人エ。御傳エ

ナサレテ下サレ。カ様ニ申テモ。マダ疑ヒガ御座ルナラバ。御寺エ御歸リナサレテ。私ガ

墓所ヲ御ランナサレテ下サレ。其墓印シルシニ

(9丁ウ) 松一本柳一本ウエテゴザル。其墓所ニ急度ナニカ

不思議ガ御座ルリマ正ニ依テ有中ヲカサ。ドウゾ私シガ

願ヒノ如クナサレテ下サレト申故。方丈ノ

被申ニハ。其方ガ願ヒノ通りニ。血盆経ヲ讀ンデ

ヤロフ程ニ。左様心ロエルガヨイ。シカシナガラ。

今其経ハ。余リ世間ニ流布スルヲ木開スニ依テノ聞。

其経ヲ求ル間ダガ有ロフ程ニ。其

間ダ待ツガヨイト仰セラレタレバ。病人ノ娘

(10丁オ) ガ申ニハ。其血盆経ヲ求ムルニハ。法性寺ノ本尊。

地蔵菩薩ヲ御座ル此地藏尊ハ。我父最明寺

時頼ノ安置佛デ。甚ダ灵ゲンアラタ成ル処イ

尊像デ御座才ルカサ。ドウゾ御寺エ御歸リナ

サレテ。本尊地藏尊江。御願ヒナサレテ下サ

レト申故。承知ノ趣ヲ病人ニ御答エナサレテ。

夫レヨリ急キデ寺エ歸リナサレル。扱病人ハ

悉細ノ趣イサイヲ。方丈江御願ヒ申テ。安心ヲ致シタ

(10丁ウ)カ。前後モナシニ卧シ沉ミ増テ御座ル。扱テ此
 女人ノ月水ト申スモノハ。人ト一代ノ内。三十三
 年ヲ定分トシタ物デ御座ル。上代ハ廿歳
 以上カラ始ジマツタ物ナレトモ。段々ト人間カセチ
 カシコウナ^{ルニツレテ}才御座ルカ^テ今ハ十四五。或ハ
 十二三カラ月水ノ有ル者ガ御座ルソウナガ。
 此不浄ハ。月毎ニ七日ヲ定分トシタ物ナ
 ナレドモ。或ハ一日或ハ二日。乃至三日四日デ
 (11丁オ)スム者モ有リ。又六七日有ル者モ御座ルソウナ
 ガ。此日ニ多少ノ有ルノハ。人々ノ皆生レ性デ御
 座ロフ。又^ク公家。^ブ武家。社家。ナドノ女^{中方}。衆ハ。
 別火シテ。七日ノ間^{ホカ}。外エ出テ。急度慎ンデ
 御座ルケレドモ。中カラ下タノ女^{中方}。衆ハ中々^サ。左様
 ナ^才叟ヲシテ居テハドウモナラン。カラソ^才モ
 不浄ノ有ル時ニモ。ヤハリ家ノ内ニ居テ。
 日々ノ作業ヲナシ。乃至神明荒神等ニ。
 (11丁ウ)供物ヲサ^ゲ。或ハ叟ノ縁ニ依テハ。神社
 佛閣エ参詣致ス。右様ノ汚穢不浄ノ身
 ヲ持ナガラ。嫉妬愛着。種々ノ業障ヲ。

作り重子タル因縁ニ依テ。諸佛ノ悲願ニモ
救ヒ玉フヲカナワズ。況ヤ極楽浄土エウ影キ

往生ハ

サネ_レハナラヌ。悲ヒ哉。二本ノ足ハ有レドモ。

日本ノ内デモ ノボ 登ラレザル山。踏マレザルノ

霊場。四十八ヶ所。両眼ノマナコハ有レトモ。

(12丁才) 見ル_レノナラヌ霊地。又拝ム_レノナラヌ

霊像ガアル。先ツ其二三ヲ云ヲウナラバ。

近イ所ニテ比叡山。大津三井寺ノ奥ノ院。

下上

高野山。越中ノ立テ山。賀加ノ白山。伯耆ノ

マキ トガ

大仙。榎ノ尾。榎ノ尾。大峯山。播州ノ国

書写寺ナド。都合四十八ヶ所御座ル。此

四十八ヶ所ノ御開山ハ。皆々誠ニ名師高

徳ノ御方々方々御座ル故。ドウゾシテ

(12丁ウ) 霊地霊場ヲ踏マシテナリトモ。成佛ノ因縁ニト

思召シテ。中々穴カチ女人ヲ悪クムデハ御座ラン

ケレトモ。兎角霊地霊山ニハ。次郎坊太郎坊。

グ

ナドノ大天。狗。其眷属九億四万余ソ小天

狗共ガ。山々嵩々ニスンデ居テ。不浄ノ

女ノ登ル叟ヲ不レ許。若シアヤマツテ登ル
時ハ。穩カナル晴天モ。忽チニ曇リ。震動

雷電シテ。或ハ眼コクラミ氣ヲ
ウシナ 失ヒ。ツカミ

(13丁オ)サカルヽヲガ御座ル故ニ。皆ナ御開山
タチ 達ガ。

夫ヲ氣ノ毒ニ思シ召シテ。女人禁制ト御定メ

ヲカレル叟テ御座ル 依テ
カチ必ズ御開山達ヲ

恨ムルヲハナイ。扱テ女 中
方 衆ハ兎角高野ナド

ノ山々エ。登ラレント云フテモ。大方タウソデ有ロフ
ナドト

カチト思フ人モ有ロフニ依テ。其ウソデナイ

ヲ云フテ聞カセマ正。頃ハ天長八年。五
月ノヲデ御座ルガ。四国讚岐キノ國ヨリ。

(13丁ウ)阿光夜御前ト申ガ。年七十九歳ニシテ。高
野山ノ花坂ト云処迄御座ツタ。此阿光夜

御前ト云人ハ。則チ高野山ヲ開ヒタ処ト弘
キミ

法大師ノ御母公ジヤ。此母公ノ此処エ来ルト
云フヲ弘法大師ハチヤント御知り被レ成テ

花坂ト云処エ御越シナサレルト

阿光夜御前ニチヨウド御逢ヒ被_レ成。オ_レ左
様_ウ致_ト阿光夜ノ御尋ニハ。若シ御出家。

(14丁オ) 高野エノ道筋ヲ。ドゾヲ (ママ)
カ_レソコデ弘法大師ノ被_レ仰ルニハ。此高野山ハ。
ソエテ被_レ下ト云ハレル。

五百年來。終ニ女ナノ登ツタト云_レハナイ。
女人結界ノ地テ御座ルカラ。タヤスク登ル_レマ

ハナラヌニ依テ。御前エモ死デ。白骨ニ成テ
カ_レ登ラシヤルガヨイト。被_レ仰タレバ。母ノ申

ニハ。我ハ當山ノ開山。空海ノ母デ御座ル。
其空海ノ母ナレバ。何ニモ登ラレヌト云_レハ

(14丁ウ) ナヒト云テ。二三間斗モ行クト。晴天カ俄ニ變
カミナリ

メ。雷ガナルヤラ。ヒカルヤラ。谷ガナル。山ガナル
ト。ヤガテ一町斗ノ間ハ火ノ雨ガフツテ來タ。

ソコデ弘法大 (師カ) 姉ハ。見ルニ見カ子テ。神通力ヲ以テ。直ニ三間

四方斗ノ盤石ヲ。母ノ上エニズツトサシ上ゲテ。
先ズ火ノ雨ノ難ヲ御救ヒ被_レ成タ。其様

ナ難ニ御逢ヒ被レ成テモ。是非々々空海ニ對
面セ子バナラヌト云フテ。山エ登リ掛ケサツ

キ

(15丁オ)シヤル故。ソユゾ弘法大師。ガ見ルニ見兼テ。直ニ御自

身掛ケテ御座ル御袈裟ヲ取テ地ニシイテ。

此御袈裟ノ上ヲ踏ンデ御通りナサレト。申サ

レルト。サスガ大師ノ母君ジヤ。御袈裟ノ上ヲ

ズツト御通りナサレルト。七十九歳ノ。枯レ木ノ

如キ老母ガ。忽チ月水ノ不淨ガ。御袈裟

ノ上ニ。ボト／＼ト落テ。火焰ニナツテポツ／＼ト

モエ立チ増。ソコデ母君モ。扱テ々不思議ナ

(15丁ウ) 叟デハアル。此老躰ニ。今更此様ナ障リガ

イコゾハアルト

サヨト去テ。云テ

デケテ。我子ニ對面ノ出来ン。サテ／＼口チ惜シ

大キナル岩ヲツカミ出シテ。子ジラレタ。此岩ガ。

今ニ於テ山ノ麓ニ有ル。其ガ則チ。阿光夜

ノ子ジ岩ト云フ。高野山江參詣シタ衆ハ。

皆ナ御存知ジヤ有口。又地ニ ^{シイ} 布夕御袈裟

ヲ。直ニ谷水ニ洗フテ。岩ニ掛ケテ母 ^{キミ} 君ノホサレ

タ。其岩ヲ只今ニ袈裟掛岩ト申テ。今ニ

(16丁オ)

御座ル。皆ナ是眼前ノコジヤ。併シ高野山ト申テマンザラ女ナノ行レント云コハナイ女女人堂迄ハ皆行カレル女人堂カラ先キハ一ト足モ行カレヌコデ母君ノ申サレルニハ。御出家ニハ。大方タ空海ヲ御存知デ有ロウガ。今生ノイトマゴイニ。ドウゾ逢シテ下サレト申サレルデ。

大師ノ仰セニハ。コレ御老母人。出家ト云者ノハ。

一ト度親ノイユ処ヲ出テ。二度ト對面セヌヲ

(16丁ウ) 出家ト云。出家ノ對面スルヲゲン還俗ト申テ。甚ダ

法ノ道ニソムクカナレドカキ。對面ノコハ。トント思ヒ切ツテ。

是カラ百町斗アトエモトル行ケト。慈尊院ト云寺ガ

有ル。此寺ハ皆々參詣ノ女ノ。行ク寺テ御座ニ依テ。

ル。カラ夫レエ行テ。先ツヲ休ミナサレト。仰セラレテ。ソノ慈尊院ト申江御ヤリナサレテ。

一向自分ガ空海ジヤト云コハ。少モ仰セラレナシ。其夜ハ母君モ。慈尊院エ止宿

(17丁オ) ナサレタ処ガツイニハ病氣ニナラセラレテ。命

終ナサレタ。少中^シ弘法大師ハ。直ニ其寺ニ於ヒテ。
 三七日ノ間タ。法^フ叟^ス供^ク養^ヤヲ御勤メナサレタ。
 其廿一日目ノ夢ニ。母君ノ告ケニハ。此大悲尊
 ノ追善供養ヲ受テ。只今都率天江往生
 シテ。誠ニ無為ノ大安樂ヲ得タト申^マガ
 御座ル。右様弘法大師ノ母君サエ。右ノ
 通リ^ニデ御座ルカ^ニ中々以テ。外カ^ニノ女ナハ
 (17丁ウ)登ラウト云フハ甚タ無理テ御座ル。又中古ノ
 頃。或ル女ガ。高野山江登ラレヌト云^フハアルマイト
 思フテ。夜ル忍^シンデ。高野山^ニ登リカケタ処^ニ口ガ。
 大門^ニ迄登ルト云フト。直ニ天狗ガツカ^ンテ。マツ
 ニツニ引サイテ。千本杉ノ梢ニ引掛ケテ
 置^キタ^リガアル。又山城ノ笠置ノ浪人ガ。自
 分ノ娘兩人ヲ。男子ニ仕立^シテ。同高野山エ
 登^リタ^リ処ガ。是モ不動坂^ニデ。二人ノ娘ヲツカミ
 (18丁オ)取^リラ^レテ。杉ノ梢ニ兩人トモ引掛^テ。サ^ラシ^タト
 申^マガ^リ御ザル。實ハ五六才。十才^ノ迄ノ女ト。
 八九十二成^ニタ女ハ。誠ニ男モ同然サレトモ。兎角
 女性ハ百ニ成^テモ女ノ性ハ離^レント見^エル。慎マ
 子バナラン。右様ノ叟ハ高野山斗^ジヤナイ。

役ノ行者ノ母君ハ。自分ノ子ニ逢ヒタイト
思フテ。ヤカテ大峯山江御越シナサレル時。

甚ダ雨ガフル故。ミノ笠ヲキテ出カケラ

(18丁ウ) レタ処ガ。凡道ノ五十丁余程行ト思フト。山

ガナル。谷ガナル。雷カナル。マツクラニナツテ。一向

一ト足モ行カレン様ニナツテ。其俣ソコニウチ

タヲレテ。誠ニ女ナ程浅マシイ者ハナイ。我ガ

子ノ開ヒタ山エ登ルヲカナラン。無念サヨト

云テ。足摺ヲシテ。泣キ呼ケバレタレバ。思ハズ

シラズ。岩ニ足ノ跡ガ付キ増テ御座ル。今ニ

於テ此処ヲ。足摺ト云ヒ増。此邊カラヨフ

(19丁才) 大峯参リスル衆ハ。皆御存知テ御座ロフ。

右様。佛尊方ヲ産ミノ母子ゴデサエ。女人

結界ワユルサレン。況ヤ常底ノ女ナハ。猶

更ナニ依テ。ジヤカニヲ随分々々女ナ衆ハ。心口掛ル

内ニモ心掛テ。善根功德念佛称名ヲ。

ヨフ御座ル

大切ニスルガ由イ先ツ今晚ハ是デ置マ

シヤウ余ハ又明晩話テキカセマ正

(19丁ウ白丁)

(20丁才) 扱テ今晚も寒フ御座ルニ寒サモ不レ厭ヨフ

參詣ヲ被レ成タ兎角寺參リジヤノ善根功

德ジヤノト云フ様ナヨイフハデキンモノデ御座

ル。是デモ。芝居カ角力ナレバ。此レ位ヒノ堂ワ。

ミツ有テモタランケレトモ。先ツウソニモセヨ。

コフシテ精舎ト云ウテ。寺ノ地面ヲ蹈ム功德

デモ。中々スクナヒ功德ジヤ御座ラン。夫レ小共

ガ手本ニ書イテナラフ。都コ名所トカ都往

(20丁ウ) 来トカ云フ物ニモアル通り。一ト度ヒ王城ノ地ヲ蹈メバ

極樂浄土江往生スルトアル。此王城ノ地ニハ法華

經八軸ヲ書キ写メ京洛中ニチリバメテアルソノ

法華經八軸ノ上エヲ蹈ム故ニ王城ノ地ヲ蹈メバ

其功德ニ依テ極樂浄土ニ往生ヲスルノジヤ

マシテ況ヤ日々ニ梵行修行ノ地面ナレバ

ソノ功德ワ中々廣大無邊ナリテ御座ル

扱法性寺方丈ハ。病人ノ願ヒヲ聞届ケテ。

(21丁才) 早速寺エ御歸リ被レ成テ。寺中ノ坊様方エ。

病人ノ願ヒノ趣ヲ咄シテ。ソレカラ直ニ寺ノ

ウラニアル処ノ。尼御寮ノ墓所エ御出デ

被レ成テ御ラン被レ成タ処ガ。病人ノ申ス如ク。

五輪ノ下ワ誠ニ朱ニ
ツテ有ル。カキ方丈モイヨ
フカシ 侵タルガ如ク血ニ染マ
血盆地獄ノ

苦患ヲ受ル叟ハ。疑ヒモナイト心得
被_レ成テ。其ノ日直ニ地藏講會ヲ修行

(21丁ウ) 被_レ成テ。其夜ハ皆坊様達チ一同ニ。本尊地藏尊
ノ前ニ。ヲ通夜ヲシテ居増テ御座ルケテドモ。外ノ

坊様達チハ最早八ツ頃ニモ成ト夫々ニ子サセテ。

方丈只一人少モ子ムラズ。何卒血盆経ヲ我ニ

サヅケテ。娘ノ化病ヲ平癒致サセテ被_レ下ト。

一心ニ願ヒ奉リテ。南無六道能化地藏大尊

ト。稱名三昧ニ入テ御座ツタ処ガ。思ワズ知

ラズ暫ク眠リ被_レ成ルト。不思議ナル哉。

(22丁オ) 八旬余ノ老翁ガ。手ニ錫杖ヲツイテ。光明カク
ヤクトシテ御告ケニハ。和尚佛誓ヲタガワズ。

衆生濟度ノ志願深キ故ニ。龍宮界ニ納マツテ有ル

処口ノ血盆経ヲ。汝ニ授ケルカヲ明早朝ニ手賀
ニ依テ。

沼ノフチエ行テ見ヨトノヲ告ケ故。夜ノ明ルヲ

待テ。大衆方ヲ連レテ手賀沼エ御出デ被_レ成タ。

此手賀沼ト云ウ淵チハ。寺ヨリ一里斗山ヲ奥デ

ナリ御座ル則チ尼御寮ガ。此淵チ虵身ニ成テ。

(22丁ウ) スンデ居ル処口ノ淵チデ御座ル。其淵エ方丈
ガ御出被_レ成ルト。忽チニ水ガ揺動メ。誠ニ龍門ノ

瀧ノ揺動スル様ナキ。御座ル其中ヨリ一茎ノ
蓮華ノ花ガ湧キ出ルト。其蓮華ノ花ノ

乗テアル。

中ニ。一卷ノ御経ガ

御座ル方丈ハ是コソ。此度ヒ

地藏尊ヨリ御授ケテ下サル。血盆経ト。礼

拝恭敬シテ。難クレ有リ頂戴メ寺エ御歸被

レ成テ。直ニ其日カラ初テ。病人ノ願ヒノ通り。

(23丁才) 七日ノ間。毎日一千卷ツヽ誦誦シテ御座ル。

其七日ニ満ル夜半ニ。空中ヨリ。音楽ガ

聞エテ。紫ノ雲ガ棚引テ。花ガフリ。異香

ガクンジ。光明ヲ放チ。蓮華ノ上ニ座メ。

菩薩ノ形チヲ現ジテ。空中ニ声アリテ

云フニハ。法性寺和尚。此ゴロ血盆経讀

誦ノ供養ニ依テ。現前ノ虵身并ニ血盆

地獄ノ苦患ヲノガレテ。直ニ兜率天ニ生

(23丁才) ヲ受ケ増テ御座ル。誠ニ此度ノ御恩。生

々世々有ガタウ御座ル。ドウゾ自今以降

此御経ヲ。娑婆世界ノ一切ノ女人江。施シテ

下サレ。左様致スト。五章三從ノ罪ガホロビ。

女人成佛ハ。マサシク疑ヒワ御座ラント。

タト

一札ヲ伸ベテ。兜率天江往生致シタ御

座ル。只今迄ハ其村ヲ。(マ) 廢 度村ト申増タ

ケレドモ。此御経ガ一部涌出シ増タワキ因縁デ

(マ) (24丁オ) 廢 度村ヲ改メテ。一部村ト申シ。又寺モ。今

迄ハ法性寺ト申タケテトモ。其モ改メテ。正泉
寺トトナエ増。又手賀沼ト申テ。今ノ女ガ虵

身ニ成テ。スンデ居タ処ノ淵ハ。タテヨコ 縦横三里余リ

モ有テ。今ニ浩々トシタ淵テ御座ルソウナ土成才居増不

禪坊主中 杯ノ中ニハ 以見テ来タ者ハ沢山デ御座ル。

又死デ行カ子バ。地獄ガ見ラレント云フミトハ

ナイ。越中ノ立山ニハ沢山ナ地獄ジヤ。

(24丁ウ) 地獄谷ト云フテ。別土成才有才ツイト地獄
カ一ト并ビニ成テ有ル。ソノ地獄ニヨツテ。ボウト

モエテ有ル地獄モアリ。只青ヲトメアル地
獄モアリ。又湯玉ノ様ニ。ニエカエツテアル地

獄モアリ。ソレ 夫ヲ見ルト誠ニ身ノ毛ガヨ立ツ。

チヨット 鳥渡見テサエ恐ロシイニ。實々アンナ中江ハ。這

入ラニヤナラヌ時ハ。ドウシタ物ジヤト思フト。

誠ニ身振ヒガ 出ヤネ 出ルケレトモ。此世テ善根功德モ
 (25丁才)セズ。念佛稱名モセズシテ。只悪イ叟斗リ

シテ居ルト。井ヤデモ ヲフ 應デモ井カ子バナ
 ラヌ。立山迄行イデモ。人々ノ了簡ニ依テ。

何ン時ドコニ。ドンナ地獄ガ デケ 出来マイトハ

云ハレヌ。昔シ元 ロク 禄年中ノ東才有ルガ泉州

堺ノ近所ニ。山瀬村ト申ス処ガアル。此
 山瀬村ノ某ガ女房ガ。今ノ月水ノ不浄

ヲ持テ。前ノ池江洗濯ニ出タ処ガ。其池ガ セントク 行

(25丁ウ)忽チマツカニツツタ。処ガソコデ其女房モ。キ
 ヲウサメ顔デ見テ居ル処ガ。増ノ赤フナル。
 赤フナル斗リジヤナイ。ドウノ波ガウツテ

クル。ソコデ今ノ女モ恐ロシウ成テキタデ。早ノ
 家江モドリテ。家内ノ物エ右之様子ヲ咄スト。

卑速キ 皆ナ トレノ 本ウチ出テ見ル処ガ。イヨノ

赤フ成テ居ルニ間違ヒナイ。ソコデドウ
 シタラヨカロコフシタラヨカロウト云ケレトモ。

(26丁オ) 一向フ仕方ガナイ。中ニ氣ノキイタ者カ有テ。

寺エ早／＼走り込シテ。カケ様／＼ナ^{ウケヤイキ}カ御座ルデ。
カチドウゾ早フ来テ下サレイト申テ。

寺ノ坊様ニ御経ヲ讀^{キヨ}デ。清メヲシテモロウ

タレバ。今迄。マツカイニ成テ有タ池ガ。直ニ元ト

ノ如ク^{キヨ}。清ラカニ成リ増^ナ。寺御座ル。ソレカラ

五六日スギルト。又タ今ノ女ガ大根ヲ洗ヒ

ニ。彼ノ池エ行タ処ガ。四五日以前ノ如ク。

(26丁ウ) 池ガ又朱ノ如ク赤フ成テ有ル故。不思議ニ

思フテ。家内ノ者エ右ノ由シヲ話シテ。又寺^ト

坊様ヲ頼ミニヤリ増テ。清メヲシテモラウ

タケレドモ。今度ハ一向フナヲラン。夫故ニ色々トスル

ケレトモ。ドフシテモナヲラン。ソコデ其女ハ。

池ノ水ガ血ニ成タ^ト。夫レヲ苦ニシテ。其日ヨリ

病氣ニ成ル。夫故山伏ヲ頼ンデ。祈禱シテ

モ。又方々デウラナウテモラウテモ。一向ナ

(27丁オ) ヲラス。ソコデ寺ノ住持エ頼ンデ。流レ

灌頂ヲシテ施餓鬼ヨンデモライ又々^{ウタレバ}

被^レ成。或ル時下総ノ国ヲ。アチラコチラト御
アルキ被^レ成テ御座ルガ。不圖日グレニ成タ
故^ニ幸ヒト村ガ有ルカヲイノ村エ行キドウ
ゾトメテモラウウト思フテ御出被^レ成テ

(軒カ)

去ル在所エ行テ。ナン。斬モ^レモ。宿ヲ御頼ミ被成ルケレドモ。一向
トメテクレタ人ガナイ故。ソコデ村ハツレニ破^レ

(28丁ウ)タ辻堂ガアルカラ。是ハ幸ノ^レジヤト思シ召テ。

其夜ハ其辻堂ニ野宿被^レ成テ。先ツ樂々ト

御休ミ被^レ成タ処ガ。夜中カ。大方タ八ツ時分

デモアロフカト思フ頃ニ。其堂ガメキ^レト

鳴ルカラ。是ワ何^レ更^レヤラト。目ヲ明ケテ

御ラン被^レ成タレバ。堂ノ前ニ赤鬼ト黒鬼

ト。鉄棒ヲヒツサゲテ。キヤ^レト立テ居ル。

扱テ不思議ナ更^レヤト。石屋和尚ノ

(29丁オ)御ランノ内ニ。一ツノ鬼ガ妙西^レト叫ブト。

ドコトノウ一人ノ娘ガ出テ来タ。処中ガ其

娘才腰ヨリ下タワマツカニ朱ノ如クニナツテ。

誠ニ御殿女中ノ火ノハカマハイタ様ジヤ。

泣ク^レ鬼ノ前ニスワルト。直ニ二ツノ鬼ガ。

娘ヲ引トラマエテ。熱湯ヲ口チエツギ

込ミ。火ノ柱ヲヲタカセ。色ロ／＼ニ責メテ。
娘モ鬼モ。諸口共ニ消エウセテ仕舞フタ。

(29丁ウ) 扱々今ノ世ニ。希有ナ叟才有ルモノ哉ト。

去^思イ^フ御経ヲ讀^テ御座タル内ニ。夜モ
明ケタカラ。又外ノ村エ行テ。食ヲモロウテ

(軒力)

喰フト思召テ。御越シ被^レ成タ処ガ。一 斬ノ家

ニ大勢イ立ヨリテ。泣キ悲ム様子ヲ御ラン
被^レ成テ。何叟デ御座ルト御尋子被^レ成タ

レバ。今日ハ我娘ノ初七日デ御座ル。幸ヒ
ノ^コナレバ。先ツ御上リ下サレテ。ドウゾ御

(30丁オ) 経ヲ巻卷。ヲ 誦^ヨミ下サレト。願ヒニ任セテ。則チ

讀^{トキ}経被^レ成。御 斎モ濟デ。段々亭主エ話シ

(第力)

次 手ニ。妙西トアル戒名ノ^コカラ付ケテ。

下上

夜前辻堂ニ 宿野致シタラバ。カ様／＼ト。

委細ニ話シ被^レ成タレバ。ソレコソ間違ヒモ

ナキ我娘 御ザル。ドウゾ御慈悲ニ。御

助ケ被^レ成テ下サレト申故。随分承知ハシタ

ニ依テ

ガ。シカシ。疑ヒガ御座ルツテハワルヒカキ。

(30丁ウ) 今夜拙僧ト一所ニ。辻堂エ行テ見タガヨ

イト申シ合セテ。日ノ暮レルヲ待テ。夫婦ト和尚ト。

右ノ辻堂エ行テ待テ居ルト。夜中カ頃トモ

ドコ

思フ時分。赤カ鬼ト黒鬼ガ土々鬼ガ。何処トモナウ

ユウ

頭レテ。夕ベノ通り。妙西ノト呼ブト。娘ワ

御膳ヲ一膳以テ出テ。我等ガ両親。今

御出家キ

沙門キ。

朝。供養ノ御。齋ヲ

トキ 差シ上タ

ニ現ハレ候口故。ドウゾ此レヲ受ケテ。今夜

セメ (ママ)

(31丁オ) ノ。責ハ。ユルテ下サレト。泣クノ

鬼。其ノ御膳ヲトツテクライ。其夜ノ

セメハユルシテ。又娘モ鬼モ一所ニ消エウセ

テ仕フタ。誠ニ兩人ノ親達ハ。和尚ノ衣ノ

下タヨリ恐ロシノ。梅干シ程ニ成テ。見テ血

ノ涙ヲ流シ。夫ヨリ和尚モ。同道ニテ家ニ帰り。

信実私シガ娘ニ相違御座ランカキ。

コト 爰

鬼ヲ頼メド

申セボ。ニツノ

ドウゾ御慈悲ニ。御助ケ被成テ下サレ
 (31丁ウ)ト。申故。石屋和尚ハ夫レカラ一本ノ塔婆ヲ
 コシラエ。経文ヲ書テ。今ノ辻堂ノ前エニ
 建テ。其夜モ。又辻堂ニ野宿シテ。亡者ノ
 出ルヲ待テ御座ルト。アンノ如ク夜中時分ニ
 ナルト。二ツノ鬼。并ニ娘ノ妙西現レ出ル。左様
 敬不ト二ツノ鬼ガ。扱テ不思議ト云ウテ。
 今ノ立テアル処中ノ塔婆ヲ見テ。無人今
 成佛名残苔下露トヨシテ。二ツノ鬼ハ。
 (32丁オ)カラ／＼ト打笑ヒ。消エ失セテ仕舞ヒ。娘ノ
 妙西ハ。忽チ尊ノ形チト成リ。華(運力)花ノ上ニ
 座ヲシメ才彌陀ノ浄土エ往生ヲ致シタ。是レ杯ナドモ
 先ツ。血盆地獄江落タノデ御座ル。其證シヤウコ抛
 ニハ。腰ヨリ下モハ。血ニ染リ朱ノ如クニナリ。赤
 黒ノ二鬼ニ責メラレル。末代逆モ此ノ様ナ
 不思議ガアル。然シ乍ナカラ御経ノ功力。又ハ
 塔婆ノ功德ルデ。右様ノ悪果ヲマヌカレタ。
 (32丁ウ)十時両親ハ娘ノ成佛ヲ見テ。誠ニ有リ
 難フ思ヒ。夫ヨリ直ニ。其ノ辻堂ヲ建立致シ

テ。今デハ下総ノ国。カシノ。神島ノ。妙西寺ト云ウテ。

大キナ寺ニ成テ。御座ル。其寺ノ開山ハ則チ

今ノ石屋和尚デ御座ル。誠ニ名徳ノ御方ヲ。ユキ

御ザルカキ。前段ノ不思議ナドモ有タ物
ジヤ。ヘタノ長カ談儀ナレドモ。昔シ誠ニ無

信心ナ者ガ。甚ダ信心者ニ成タカ有ル。カキ。

(33丁オ) 話シテ聞カセ正。甲斐ノ国ニ。郡内ト申処ロガ

有ル。則チ郡内ト云ウ。絹ガ出ル処ジヤ。其処ニ。

五兵衛ト云テ。相應ニ。有徳ニ暮ラス者。エテ

御座ルケレドモ。到テ不信心ジヤ。子供モ沢山

有リ。是レ一ツ不足ト云フ更ハナケレドモ。兎角

佛ケキラヒ。故。子供ガイロト。勧メルケ
レドモ。一向ガテンセン。最早彼レ是レ。年モ七十

デ御座ルケレドモ。子供モ致シ。様ナイ。ソコ

(33丁ウ)デ。アニキ 兄貴ガ クフウ 工夫ヲシテ親父ニ申ニハ。扱テ年

ヨリニヨイモウケガ有ルガ。シテ見タラバト云
エバ。親父ガ申スニハ。年ヨリノモウケハ何ジヤ。

ト云ウ元来不信心者ノ。甚 強慾者ノジヤカチ
ソゴデ兄キガ。親父様ン。年ヨリノヨイモウケ

ト云ウハ外デモナイガ。此間ヨソカラ。一日ニ

念佛ヲ一万返ツゝ申テクレタラバ。一日ニ
金壹兩ツゝヤラウト云テ来タガ。ナント

(34丁オ)念佛ヲ申テ見タラドウジヤロト イエバ。
トシヨリ 年寄ノ遊ビ仕叟ニ。 去フチ

親父ガ申ニハ。ナル程 年寄ノ遊ビ仕叟ニ。

一日ニ壹兩ツゝノモウケ。ナル程ソレハ。甚ダ

ヨカロウト云ウテ。夫レカラ念佛ノモウケニ
カゝツテ。毎日一万返ツゝ。ヨクニカゝツテ念佛

ヲ申テハ金壹兩ツゝ。兄キカラ請取ル。或ル日。親
父ノ申ニハ。兄ヨ此様ニ大切ナ金ヲ出シテ。

人ヲ頼ンデ。念佛ヲ申テモラウハ。元来何ノ

(34丁ウ)為ジヤト云ウデ。少中才兄キガ申ニハ。サレバデ
御座ル。金ト云フ物ハ此世デノ宝ヲオナレバ。死デ

カラ一文モ持テハ行カレン。縦ヒ相應ニクラス

者デモ。死ルト云ウト。カラビラ一枚ヨリ外ニ。

何ニモ持タシテハヤラン。 ज्याニ依テ。此世ニ居ル

内ニ。金ヲ出シテナリ共。念佛ヲ申テモラヒ。

自身ハ勿チ論ノ。ドウゾシテ。来世ハ極樂

浄土江。往生シテ三十二相ノ佛トナリ。七宝

(35丁才)ヲ以テチリバメタル処ノ。家ノ中ニ居テ。金

銀錢米ハ。自然トワキ出テ。命ハ永劫尽ル

ヲナク。モロ／＼ノ樂ヲ。受ル処エイコウト

思フテ。大切ナ金銀ヲ出テ。人ニ念佛ヲ

申テモラヒ。又自分ニモ勢出テ善根

功德ヲナシ。念佛稱名シラレル。|^レデ御

座ルト。申才^{云フテ}聞カセタ^レイバ。成ル程此世ハ

カリノ世。未来ガ大切ナレバ。此世ニ居ル内。

(35丁ウ)善根功德ヲシタリ。念佛稱名セ子バナ

ラン^レジヤ。扱テ^レ今迄ハ。我シモ大キニア

ヤマツタ。ドウゾ^{ケウ}今日カ^マデ申タ念佛ヲ。

取リカエシテクレイト云ウテ。今迄取タ処ノ

金ヲ皆カエシテ。自分ノ念佛^キトオシテ。

虚假心ヲ變ジテ。至誠心トナツテ。其後チ
ハ。誠ノ信心ノ行者トナリ。八十五歳ノ春。
正念ニ往生ヲトゲタト御座ル。

(36丁才) 右様ナフモ有テ。信心モイロノ処カラ
起ルモノデ御座ルデ。ドウゾ各々方モ。イヤナ
寺参リモシタリ。又イヤナ善根功德モ

シタリ。施シモシタリ。念佛モ申タリシテ。ド
ウゾ死デ地獄エイカン様ニスルガヨイ。
念佛申スモ。善根功德スルモ。皆人々ノフジヤ。

才御座ル此世ゾノ借金ハ。財布カタゲチ
取リエタル。私シラモ其借金ニホトシド困リ

(36丁ウ) 増ネケレトモ右申ネ念佛稱名善根功德不
方劫末代取リエタル者ハナイ又此血盆経ノ
因縁功德ニ依テ。難レイ成リ女人成仏モデケ

ルコデ御座ル 土依チ 皆ナ必ズ大切ニ菩提

心ヲ起シテ。日々 身分相應ニ。善根功德
ヲナシ。折角念佛唱名ヲ致スガヨイ。兔

角此世デ ウエ 植タ タ子 種デナケレバ。ヤクニタムン。
此秋仕舞ノサムイ世話シナイニ勢出シテ

(37丁オ) 菜種ヲウエテ置ク様ナモノジヤ秋イソガ
シイニウエテ置カラ春ニ成ルト種ガ取レル
秋イソガシイト云テウエテ置ント其種ハ
取レンチヨツト云ウ時ニハマヅ此様ナ同利
ジヤカラ必ず大切ニシテヨイ処ノ善根功
徳。ノ種ヲウエテ置ガヨイ